

女刑事タマリ

やみ けんぞく あ

闇の眷属に遭う



おうみかけお

近江影夫（四十五歳）は、女性ばかりを狙う連続殺

人犯である。所謂超能力者であり、強力な念動力（サイコキネシス）により、凶器を用いずに殺害するとう、恐るべき凶悪犯だ。更に加えて、遠感能力（テレパシー）により、いかなる待ち伏せや尾行をも悉く察知されてしまうため、十年以上の長きに渡る警察の奮闘にも関わらず未だ逮捕できずにいた。過去に一度だけ睡眠薬を用いて運良く拘束に成功したが、薬物の効果が切れた途端に、拘束衣はおろか、留置場の施設すらいとも容易く破壊して逃亡。次回こそは薬物を増量してと息巻いたところで、もはや同じ手は二度と通用しそうになかった。

近江容疑者を追跡する刑事たちの中に、安土美咲も

あづちみさき

いた。警察との小競り合いの最中に、美貌の持ち主である彼女の存在を知った近江は、美咲を次なる標的に定め、彼女の出先に頻繁に出没しては、執拗に付け狙うようになった。警察は二十四時間態勢で彼女に護衛をつけて近江の襲撃に備えた。板倉珠美刑事は志願してその護衛チームの一員となっていた。

いたくらたまみ

「タマミが側にいることが吉と出るか凶と出るか…」

護衛の任務に関する指示を与える際、珠美の上司で

ある堂々どっどっ映二係長が眉間に皺を寄せて呟いた。

「何しろ『R署のツイーンズ』と呼ばれるほどそっくりな二人だからな」

「でも実際のところ、安土刑事は近江を誘き寄せるための囮なんですよね？ 彼女一人にそんな危険な役目を押し付けるわけにはいきません」

珠美はきっぱりと言いつつ放った。

「とにかくだ、タマミ。近江が襲ってきたら、すぐさ

ま頭部を狙い撃て。一瞬の躊躇もならん。奴は常識の
通用しない化け物だ」

「射殺命令が出ているのですか？」

珠美の喉がごくりと鳴った。

「拘束することが困難である以上、已むを得まい。こ
れは警察上層部だけでなく、各界の有力者の意向でも
ある。君も知っているだろうが、既に著名人の関係者
からも犠牲者が出ているため、各方面から様々な要請
やら圧力が警察に持ち込まれているのだ。これはもう、
警察による事実上の死刑執行であると言えるかもしれ
んのだから、今から辞退してくれても構わんよ。もと
もと君にやらせるつもりはないのだからな」
「いえ、やらせてください。私も美咲くんを守りたい
んです」

珠美は唇をきゅつと引き結んだ。

それは、珠美がトイレに行っている隙に起こった。
夜の警察署内に轟音が響き渡った。手を拭く暇ももど
かしく、珠美は廊下へ飛び出した。

美咲の護衛は、珠美以外は三交代で数人が彼女の周
囲を固めることになっていた。夜間は珠美が密着警護
という形で警察宿舎の同室と一緒に寝泊りをするのだ

が、宿舎へ移動するまでの僅かな時間だけ警備が手薄になっていた。警察署内は最も安全な場所であると、誰もが安心していただけからだ。

「安土くんが浚われた！」

散乱した机や椅子や書類の中から身を起こした刑事が出血する後頭部を押さえながら叫んだ。

「しまった！」

珠美は歯噛みした。

「奴は上だ！ 上へ向かってるぞ！」

別の叫び声に、珠美は素早く反応した。まっしぐらに階段を駆け上がっていくと、確かに階上を目指すと、思しき足音が聞こえてくる。

珠美が屋上へ躍り出ると、美咲の背後から近江が彼女の胸を両手で揉みしだいていた。にじり寄って距離を縮めながら珠美は、拳銃をホルスターから引き抜いて構えた。

「ん？ お前ら双子か？」

近江が二人を見比べて目を丸くした。

「警察なんぞにこんなイイ女が二人もいるとは、俺は

ツイてるぜ」

乱暴に乳を掴まれて美咲は苦痛に表情を歪めた。珠美はこみ上げる怒りとともに叫んだ。

「彼女を放せ！」

「いいとも」

近江は両手を広げた。美咲はすぐさま飛びのいて、珠美の方へ駆け寄った。

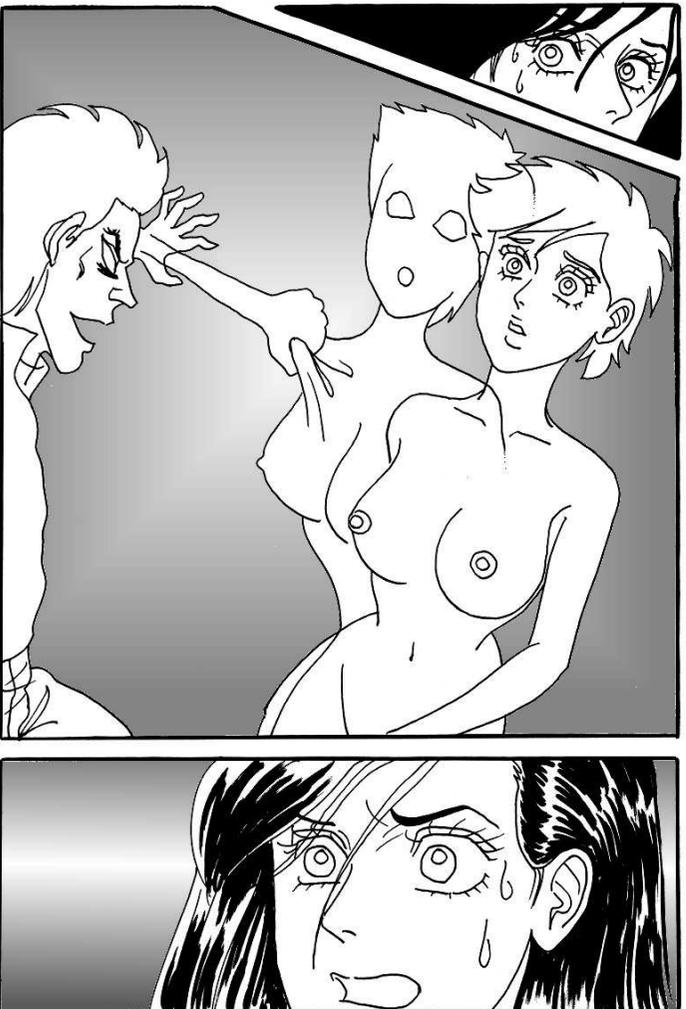


近江が両手指をピンと開いて二人に向けて突き出すと強烈な衝撃が走り、彼女たちの服が引き裂かれて全身の肌が露になった。更なる衝撃が珠美の手にした拳銃を弾き飛ばし、彼女の身体は突き飛ばされるようにして、屋上出入り口のドアに叩きつけられた。見えな

い手で押さえつけられているかのように身動き一つできなかつた。これが近江のサイコネシスなのだと言った。女は身をもつて知らされることとなった。

「そこで、しばらく大人しくしてろ。後でじっくり戴いてやる」

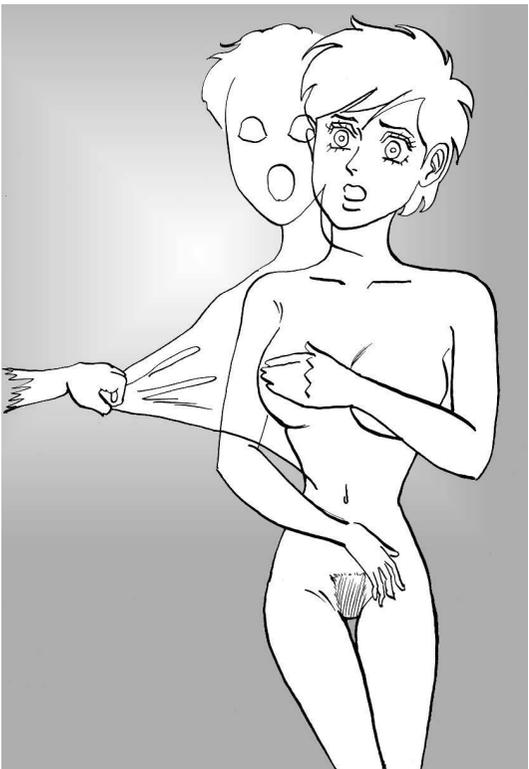
近江の姿が二重にダブって見えた。所謂幽体離脱である。幽体の手はアニメのゴム人間よろしく数メートル伸びて、美咲の胸に指を突き入れると、今度は美咲の姿が二重になった。美咲の幽体がぐいぐいと引っ張られていく。



—— 魂を引きずり出して、奪おうとしている……!!

珠美は直感的にそう理解した。

—— 美咲が殺される！



近江の幽体の口が、引き寄せた美咲の幽体を吸い取るうとしていた。

その瞬間、珠美を押さえつけていた力が弱まった。間髪入れずに珠美は足元に落ちていた拳銃を拾い上げ、一足飛びに距離を詰め、近江のこめかみに銃を付きつけて引き金を引いた。ぐしゃっと胸の悪くなるような音がして近江の頭部から大量の血液が飛び散って、近江はその場に頽れた。

倒れた近江の身体から、黒いもやもやしたものが湧いて出てきた。それは人の形となって、気付くと、一人の男が闇の中に佇んでいた。



「いやいや助かったよ。この男とはそろそろ手を切る潮時だと思っていたので、手間が省けた」

「何者……？」

珠美は拳銃を構えたまま相手を見据えた。

「生憎だが拳銃は使えないよ。弾丸が当たるべき肉体を持たないのだからね、私は」

「幽霊なのか？」

「もう少し位の高い存在だ」

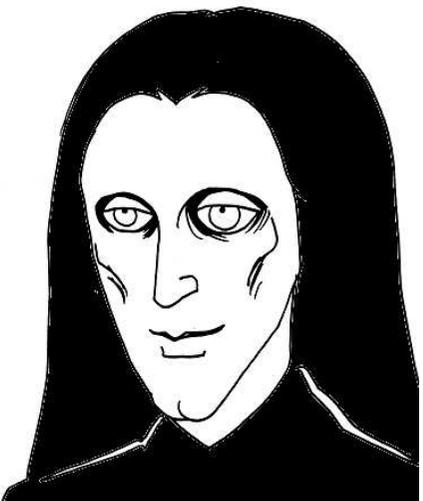
「悪魔……か？」

「そのようなものだ」

「まさか、あんたは私を加勢したのか？」

「私は何もしていない。彼を保護しなかったし、君の拳銃を完全に破壊しておけというように入れ知恵もしなかった。この勝負、負けた方とは縁がなかったのだと思うことにして、ただ成り行きを見守っていただけだ」

黒い男は目を窄めて笑った。



「それにしても、君は大したタマだな、板倉珠美刑事」

「私の名前を知っているのか？」

珠美の肌に鳥肌が立った。今更ながら裸の身体を両手で隠した。

「君に与えられたチャンスはたったの一度だけだった。奴は魂を喰らおうとする時に僅かな時間だが無防備となるのだ。そのワンチャンスを、君は見事にモノにしてのけた。一瞬の迷いも躊躇いもなくね。そうした迷いのない人間の姿というのは実に美しいものだな」

黒服の男は気障ったらしく肩を竦めた。

「男というのは馬鹿な動物だ。君たち二人の美女の裸に目が眩んで舞い上がり、詰めを誤った。それに引き替え、君は素晴らしい器だよ、タマミくん。今後、是非とも親密なお付き合いをしたいものだな」

男の姿が薄れようとしていた。

「待て！」

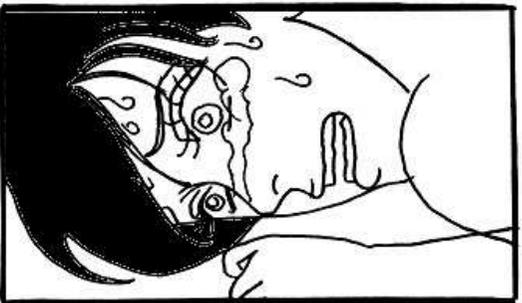
珠美の制止が聞き入れられる由もなく、男は闇に溶け込むようにして消えた。

「大丈夫か、タマミ？」

背後からボスが自分の上着で彼女の身体を覆った。茫然としていた彼女はそれではっと我に返った。倒れている美咲に駆け寄り、ボスの上着を掛けてやりながら彼女の顔を覗き込んだ。

「美咲ちゃん、美咲ちゃん、しっかりして」

美咲は引きつった表情のまま、ガタガタ震えていた。「早く手当てを！」



美咲の身体を抱き締めながら珠美は誰にともなく叫んだ。二人の女性警官に抱きかかえられながらぐったりした美咲が連れて行かれた後も、珠美はその場を動けなかった。毛布に包まれたまま、血の海に転がる男の身体から目が離せなかった。今自分が体験したことは一体何だったのか。

「噂通りのいい腕だな、板倉くん」

美咲の上司に当たる警部が男の脈を調べながら言った。

「一発で射殺。狙い通りだ」

珠美の顔色がますます青ざめた。



「正当防衛さ。どこからも文句は出んし、出させんだらうよ」

ボスの声が遠く聞こえた。珠美はいつまでも立ち尽くしていた。



今回の件は、メディア等では、近江容疑者が逮捕の際に死亡した事実のみを伝える短い報道がなされただけで、世間の噂になることはなかった。警察内部でも声高に言及する者は誰もいなかった。ただ、体を張って活躍した、『R署のツイنز』こと、板倉珠美、安土美咲の両刑事に対しては皆が惜しめない賞賛の念を抱いていた。

だが、安土刑事は心身に蒙ったショックのせいで、入院したまま休職となってしまった。彼女の容態を思うと、珠美も胸が痛んだ。珠美自身も、いかに凶悪犯とは言え、一人の人間を射殺してしまったことが重く心に押し掛かっていた。

それでも、珠美は勤務を続けた。日々の雑事をこなすことで、何とか平静を保っていたのである。

車の運転中、赤信号で停止していた珠美の顔色が変わった。バックミラーにあの得体の知れない黒服の男の姿が映っていたからだ。しかし、もう一度ミラーを覗き込んだ時には、あの禍々しい姿はなかった。振り

返って肉眼で確かめても、誰もいない。

—— あいつに付け狙われている……？

背筋がゾツと凍り付いた。

〈終〉